カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第8回　木下 亮 氏（昭和女子大学教授）

昨年４月の長崎を皮切りに姫路、札幌、静岡を巡回し、2月に東京ステーションギャラリーで締めくくった『奇蹟の芸術都市バルセロナ展』。第８回はこの美術展を企画監修された昭和女子大学の木下先生にお話を伺いました。

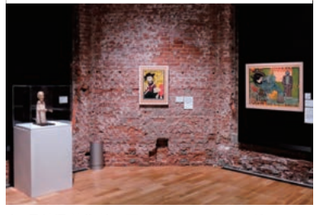
長崎県美術館

AMICS 東京会場が今回のコロナウィルス対応で３週間足らずで中途クローズになってしまったのはたいへん残念でした。今日は展覧の機会を逸してしまった会員の方達のためにもお話を伺えればと思います。まずそもそもの企画の狙いといったところから伺えますか。

木下 美術展タイトルの通り、ずばり「バルセロナ」という街にスポットをあてる狙いでした。日本ではジュアン・ミロもサルバドール・ダリもカタルーニャの画家であることは紹介されていますが、彼らの美術が育まれた環境というものは残念ながら伝わっていないと言えます。またムダルニズマについてもガウディの建築は知られていますが、絵画はまだまだです。今回は19世紀に都市改造が始まり、1888年の万博を経て変貌を遂げていくバルセロナという街自体、それが主人公であるという点を強く意識しました。

AMICS カタルーニャ美術館所蔵品を中心として、さらに多数の美術館、個人コレクターから貴重な作品がやってきましたね。企画から実施にこぎつけるまでご苦労多かったのではないでしょうか。

木下 カタルーニャ美術館のコレクションがまとまって日本にというのは初めてです。美術展はひとつの美術館から作品をお借りして、テーマを設定するのがいちばん楽と言えます。しかし主役の都市バルセロナに焦点を当てるには、ひとつの美術館からでは十分とはいえません。更に他の美術館にもお願いにまわりました。26箇所も所蔵先から作品をお借りしてきています。求める作品によっては個人コレクターを訪ねた方がいいというアドバイスも現地で受けました。マドリッドが中央集権的に、たとえばプラド美術館に作品が集まるのとは違い、カタルーニャでは自治州、県、市と異なった行政区画に属する美術館が共存しています。また美術館同士には管轄する自治体の違いからか、付き合い方にデリケートな面があるようで、私たちはその辺りを全く知らずにアプローチしていったため、難しい局面にもなりかけました。



上：長崎県美術館　下：東京ステーションギャラリー

バルセロナは地中海に面したコスモポリタンな街です。一方で言語をはじめ、カタルーニャの伝統を尊ぶローカルなところがはっきりあります。その両方を意識してつきあうことを学びましたね。例えば地元の美術界で知られる有力な一族には、私の祖父母は有名な画家の誰々と親戚で、というような話がついてきます。そこには困窮の中で制作を続けた薄幸の芸術家の人生ではなく、ブルジョアに生まれて国外で学び、芸術活動を全うしたということが窺えます。人間関係にも配慮しつつスマートに出品交渉する必要性を認識しました。

AMICS アイデンティティーをしっかりと持っているとも伺いましたが。

木下 そうですね。日本からネットで各地の美術館や研究機関にアクセスすることが頻繁にありました。カタルーニャはWEB上での公開が進んでいると言われています。私は芸術はニュートラルなものとは考えていません。社会や政治との結びつき、ある意味では国の顔にもなりえると思います。カタルーニャの人たちは、その豊かな文化を自分たちの顔にするのだということを、はっきりと認識しながら仕事をしていました。美術館だけでなく図書館、文書館などもきちんとしていますし、外に情報を発信することにも慣れています。その根底にあるのは自分たちの芸術にアイデンティティーを見出し、それを外から認めてもらいたいという意志です。ですので、こういう作品を貸して欲しいというリクエストに協力的なだけでなく、「今はそれは貸せないのだけど、これならどう？」「ネットのカタログには出ていないのだけれど、実はこういうのもあるよ」といった提案もいただきました。ある意味ではこちらが試されているのです。なぜその作品をここに持っているのか、その理由には個人の影響力のいまだに強いことが関係しているのかもしれません。交渉で苦労させられた点であり、豊かな作品がまだアチコチの壁に掛かっているかもしれないと、作品探しをさらに続けることにもなりました。

AMICS なるほど。バルセロナがますます魅力的に思えてきます。

木下 都市研究の専門家に言わせると、19世紀ヨーロッパにおける都市大改造ではパリ、ウィーンそしてバルセロナがわかりやすいそうです。パリの場合は古い町並みを壊したうえに上書きをするのですが、バルセロナの場合には旧市街の外が軍事的な理由から更地だったのです。そこにイルデフォンス・サルダーの一辺114mの方形のブロックと20m幅の通りによって構成される新市街プランが承認され、ムダルニズマの建築が始まります。一方で旧市街のあの狭い通りでは、歩いてちょっと行けるような場所にピカソがいたとか、「四匹の猫」にみんなが集まってきたとか、無理なくタイムスリップすることができ、そういう感覚はパリ、ロンドンよりはずっと密な感じがあります。新市街と旧市街のコントラスト。それがこの街の魅力でもあり芸術を育んだものといえます。

AMICS 日本ではガウディをはじめとしたムダルニズマ建築が多く語られますが、今回、同時期の画家たち、ラモン・カザスとサンティアゴ・ルシニョルの作品が印象的でした。

木下 それはうれしいですね。ラモン・カザスの一家は、カリブ海諸国で財をなしたインディアーノで資産家です。彼は10代半ばでパリに渡り、本格的に絵を学びます。絵画、素描から商業的ポスターまで、そのデッサン力は秀でていました。政治的なもの、社会的な現象への興味も強く、時代の風俗を捉えるのに長けていました。人間への鋭い観察眼は友人達・知人の200点を優に超えるポートレートに表れています。スポーツやクルマの運転が好きで、彼の興味の幅はとても広いものでした。

サンティアゴ・ルシニョル
《自転車乗りラモン・カザス》

ルシニョルは20代の半ばから芸術に専念します。彼は祖父に厳しく育てられ、繊維工場の経営を任されていたこともあり、なかなかボヘミアンの道に進めませんでした。ついにパリに単身で移り、妻や娘と会わずに画家の暮らしを続けます。文学的才能に恵まれ、戯曲を書いたり、カタルーニャの中世美術の調査をしたり、さらには鉄の工芸品蒐集で有名なコレクターでもありました。芸術祭のオーガナイザーとしても非凡な才能を発揮しました。まさに当時の総合芸術に相応しい多才な人物です。

この二人がムダルニズマの時代の中心的な存在であったことは間違いありません。彼らを強く意識しながら次の世代の芸術家、ピカソたちは自分たちがなにをしたらいいのかを考えていたのです。

AMICS 「四匹の猫」のシンボルとも言える「二人乗り自転車に乗るカザスとルメウ」はカタルーニャ美術館の人気作品ですね。

木下 実は「四匹の猫」を開店する前に、彼らは体育館のようなものを作っているんですよ。「四匹の猫」の店主ルメウもスポーツマンであり旅行家でした。体育館でフェンシング、バルセロナの海岸で泳ぐ、郊外にトレッキングに出かける・・・カザスとルシニョルもロバに荷車を引かせてカタルーニャの田舎を旅行しています。ロバ、馬車、自転車、そして自動車と実にアクティブです。最先端の流行を追っているということもできますが、それまでに無かった価値観で毎日を生きるということが重要だったのです。カフェの雰囲気も影絵芝居も、パリのモンマルトルから持ってきたものですが、それ以上のものがバルセロナに届いたのです。アカデミックで伝統的な芸術の価値観とは違ったアールヌーヴォーの時代、ロンドンのアーツ＆クラフツ運動にも共通のものがありますが、絵画以外の創作がクローズアップされる時代にバルセロナでもそれに呼応した芸術活動があったのです。

今回のバルセロナ展を通じて言えるのは「わたしは画家である（でしかない）」というべき芸術家が少ないということです。カザス、ルシニョルもそうですが、それ以外の芸術家も絵を描き、文章も書き、なんでもこなすという人が集まっているのがバルセロナだったのです。

AMICS 同時代にフランスやイギリスで出てきた多才な芸術家たちと比べて、いかにもカタルーニャ人らしいという点はあったのでしょうか？

木下 カザス、ルシニョルをはじめ当時の芸術家たちは、スペインがイギリスやフランスのレベルより落ちるということは意識していたんですね。バルセロナのエリートであり、条件も才能も揃った彼らがいろんなことを試みながらバルセロナの芸術活動を自由なものに高めていったことが、多くの人にマドリッドよりもバルセロナの方が芸術的だという印象をもたらすことになっていったのだと思います。カタルーニャらしさというのは、パリのアールヌーヴォーの専門家たちから見ると一種の亜流だとみられるところもあります。ただここが逆にカタルーニャの面白いところ。それを可能にしたのはバルセロナという街のコンパクトなスケールです。パリに比べればバルセロナは小さい街ですから。

AMICS ありがとうございます。では最後に木下先生が見るカタルーニャ人とは？

木下 私の昔の留学先はマドリッドでしたが、学生寮にバルセロナ出身の友人がいて、カタルーニャ人は倹約家で、芸術好きと当時はステレオタイプに捉えていました。一方、別のセビーリャ出身の友人には、カタルーニャでは顔見知りになった店の女性の名を知るのに何ヶ月もかかる、プライベートなところを簡単には見せてくれないと教えられました。今回、美術館同士の関係でもそれを感じました。相手のことを慎重に観察し気にかけている。ある意味ソフィスティケートされたところですね。それからなんといっても、今回ばかりはスペイン語とカタルーニャ語の間で翻弄されましたね（笑）。ヨーロッパは、正確さはさておき、いい意味で多言語を使いこなしている世界なんだということを、スペインでカタルーニャ語に接するなかで強く実感することができました。

＜AMICSの眼＞

今号の表紙は木下先生の話にも出てくる「二人乗り自転車に乗るカザスとルメウ」です。その右隣に同じく「自動車に乗るカザスとルメウ」その下に多数並ぶのはカザスによる友人のポートレートです。彼らブルジョアがバルセロナとパリを繋いだんですね。また今回は諸事情によりオンラインの取材となったことも新鮮でした。

木下 亮
昭和女子大学　人間文化学部 歴史文化学科　教授
スペイン近現代美術を専門とし、『西洋近代の都市と芸術 バルセロナ』（編著）、『近代都市バルセロナの形成』（共著）ほか著書多数。
「奇蹟の芸術都市バルセロナ展」の展覧会と図録を監修。